

## 作品の閲覧

2026-2-25

『ともぐい』

何でも読もう会

書物名	『ともぐい』	開催日		出席者	
作者	河崎 秋子	2月25日		5名	
<p>&lt; 作品の内容等 &gt;</p> <p>明治後期の北海道東部を舞台に、人間と獣の境界を探る問題作で、第 160 回直木賞受賞作品である。</p> <p>主人公 「熊爪」 は山奥で孤独に暮らす猟師で、鹿を狩り解体する生々しいシーンから始まる。</p> <p>「赤毛の熊」と「穴持たずの熊」の戦いや「熊爪」と「赤毛の熊」の戦いと猟犬の役割が印象的である。</p> <p>「熊爪」と社会・人間との接点は、白糠の門屋商店主井之上良輔で、そこにいる盲目の陽子と山奥で共同生活をする。いろいろなことが起こる・・・</p> <p>ラストは陽子が「熊爪」を殺す。なぜか？</p> <p>&lt; 皆さんの感想意見 &gt;</p> <p>主な意見等</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・女性作家であるが、ハードで暴力的タッチで、「穴もたず熊」と「赤毛の熊」との戦いや鹿の解体シーンは目を背けたくなるような描写。</li><li>・一方では、北海道の奥地の自然描写や獣道への探索等が猟師の目から描かれる美しさがある。</li><li>・主人公の猟師熊爪は山奥で孤独に暮らすが、人間との接点、町との接点、生活の接点として、白糠町の様子と門屋商店に絡んでの人間が意味ありげに描かれているのがよかった。</li><li>・蓼科に住む方からは「自然人類学」からのアプローチする見解が示された。ヒトを自然の一部、生物の一種と捉える観点から、熊爪の生き方に興味をもった。</li><li>・熊爪は人間でありながら獣に近づいていく様子が、なんとなく解る。</li><li>・素晴らしい猟犬の働きに感激した。</li><li>・直木賞の選考委員会でも話題になった陽子が熊爪を殺すシーンは重要な問題提起になっている。</li></ul> <p style="text-align: right;">等々</p>					